

氏 名	武内 梓朗		
学 位 の 種 類	博士（言語学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 7613 号		
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	Possessive <i>Have</i> , Existential <i>Have</i> , and Related Phenomena: Binding Relations Represented in Conceptual Structure (所有の have および存在の have と関連現象:概念構造で表示される束縛関係)		
主 査	筑波大学 教 授	文学博士	廣瀬 幸生
副 査	筑波大学 教 授	博士（言語学）	大矢 俊明
副 査	筑波大学 教 授	博士（言語学）	加賀 信広
副 査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	島田 雅晴
副 査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	和田 尚明

## 論 文 の 要 旨

本論文は、英語の *have* 構文と、それに関連する現象として主に二重目的語構文を取り上げ、意味論的な観点から考察を行うものである。二重目的語構文を関連現象とするのは、その間接目的語項と直接目的語項との間に *have* の関係が存在するということがこれまで指摘されてきたからである。本論文は、数多くある *have* 構文の中から所有の *have* 構文（例：He has a {house/wife}.）と存在の *have* 構文（例：She<sub>i</sub> has a hole in her<sub>i</sub> shoe.）を分析対象とし、前者を Possessive *Have* (PH)、後者を Existential *Have* (EH)とそれぞれ呼ぶ。それに対応して、二重目的語構文 (Double Object Construction, DOC) も、PH に相当するもの（例：Mary's long prayers brought her a son.）と EH に相当するもの（例：This strategy gave everyone<sub>i</sub> Colin Powell at his<sub>i</sub> disposal.）に分け、前者を PH-DOC、後者を EH-DOC とそれぞれ呼ぶ。

本論文は、これらの諸構文が共通して、ある要素とそれ以外の要素間に Culicover and Jackendoff (2005) のいう概念的な束縛関係（ある言語表現の指示が他の言語表現の指示に基づいて決定される関係）が存在するということを主張する。特に、PH と PH-DOC がある一つ概念構造を、EH と EH-DOC が別の概念構造を共有し、それらの構造の存在が束縛関係を生み出していることを明らかにする。それとともに、概念構造における束縛関係を仮定することで、これらの構文が示す特徴が統一的に説明されることを例証する。

本論文は 6 章からなる。第 1 章は序論で、本論文の目的と構成が述べられる。

第 2 章では、本論文が立脚する理論的枠組みである概念意味論 (Jackendoff 2002, Culicover and Jackendoff 2005 など) を概観するとともに、PH と PH-DOC が共有する概念構造と、EH と EH-DOC が共有する概念構造を提案する。その概念構造は、EXP(ERIENCE)という意味関数が空間的な位置関係を表す[Y BE [AT X]]という構造をその下に埋め込むものである（中右 1994）。EXP の第 1 項は、「場所」(Location) と「経験者」

(Experiencer) という二つの意味役割を同時に担うとし、「経験者」については、中右 (1994, 1998) の定義に沿い、空間的な位置関係を指示する状況に非意図的に関与する実体と規定される。そのうえで、「経験者」が下位分類される。この概念構造において、EXP の第 1 項が[Y BE [AT X]]内の Y 項を束縛する場合、それは「経験者」の一タイプである Possessor (= Experiencer<sub>1</sub>) という意味役割を担い、X 項を束縛する場合は別タイプの Experiencer<sub>2</sub> という意味役割を担うと仮定される。

第 3 章では、英語の have に関して先行研究により議論されてきた論点の中で、本論文の分析対象である PH と EH に関連する二つの考え方を取り上げ、批判的に検討する。一つは、PH と EH の主語項は「場所」とであるという考え方で、これはより厳密に言えば、PH と EH の主語は「場所」という意味役割を担い、かつその意味役割しか担わないとするものである。もう一つは、英語の have は全く語彙的意味をもっておらず、have が使われている文の意味はその項の値を合成的に組み合わせた結果にすぎないという考え方である。本章では、このどちらの考え方も経験的に妥当でないことを示すとともに、PH と EH の主語項は、「場所」という意味役割に加えて「経験者」という意味役割も同時に担うとしなければならないことを論じる。つまり、主語項が別の項を束縛することで「経験者」という意味役割を担うことになり、その束縛関係が概念構造上で指定されているのが have のもつ意味と考えるのである。PH は、その主語項と目的語項との間の束縛関係が概念構造で指定され、それによって目的語項の所有物が主語項である所有者に帰属する関係が保証される。EH は、その主語項と前置詞の補部との間の束縛関係が概念構造で指定され、それによって問題となる場所が主語に帰属する属性的関係にあることが保証される。

第 4 章では、PH と EH が示す様々な現象を本論文の枠組みで説明する。PH と EH の主語項が「場所」という意味役割を担うと仮定することで説明される現象を見るとともに、それらの主語項が「経験者」という意味役割も担うと仮定することで説明される現象を見る。例えば、いわゆる所有文 (本論文でいう PH にあたる) と The book is on the table. のような空間的位置関係を表す文との間には、通言語的に、統語的または形態的な類似性がある点が指摘されてきており (Benveniste 1966, Lyons 1967 など)、これを発展させて、空間的位置関係を表す文から所有文が統語的に派生されるとする論考もある (Freeze 1992)。さらに、EH も空間的位置関係を表す There is a book on the table. のような there 構文とほぼ同義であるとする主張がある (Costa 1974, Jackendoff 1987)。本章では、PH と EH がこれらの空間的位置関係を表す文と特徴を複数共有するという事は確かにあるが、事実を的確に捉えるためには、have 構文独自の性質を備えていると考えなければならないことを例証する。同種の批判が、語彙概念構造レベルで have の意味を分析する Jackendoff (1983, 1987) や Pinker (1989) や影山 (1996) などの先行研究にも当てはまることも示される。

第 5 章では、二重目的語構文が示す様々な現象を本論文の枠組みで説明する。具体的に言うと、PH-DOC では間接目的語項と直接目的語項との間に束縛関係が存在し、一方 EH-DOC では、間接目的語項と前置詞補部との間に束縛関係が存在すると考えることによって、これらの構文に関する多様な現象が統一的に説明されるということが示される。本章では、さらに、二重目的語構文と前置詞与格構文 (例: I gave a book to him.) が同一の意味構造をもつのかどうかという問題も取り上げる。特に、これらの構文の意味が構文に現れる動詞によっては完全に同一であると主張する Rappaport Hovav and Levin (2008) の議論を批判的に検討しながら、これら二つの構文は異なる意味構造、つまり異なる概念構造をもつことを論証する。従来の二重目的語構文の研究では、本論文でいう EH-DOC という構文型の存在が指摘されてこなかったが、本章の議論を通して、PH-DOC と EH-DOC という構文型の峻別が二重目的語構文に関わる現象の説明に極めて重要であることが明らかにされる。

第 6 章は本論文のまとめであり、結論とともに今後の展望が述べられる。

## 審 査 の 要 旨

### 1 批評

本論文は、英語の多義動詞 **have** に関してその最も基本的な用法である所有の **have** 構文と存在の **have** 構文を取り上げ、その概念構造を詳細かつ入念に考察するとともに、その概念構造を継承すると考えられる関連構文の代表として二重目的語構文を精緻に分析したものである。

本論文の独創性をなす第 1 の点は、先行研究のほとんどにおいて、所有の **have** 構文も存在の **have** 構文も空間的位置関係を表す文との意味的関連性からその主語は場所の意味役割を担うと仮定されていたのを、それだけでは意味的に不十分であり、場所とともに経験者という意味役割も同時に担うと考えなければならないことを、著者独自の豊富なデータに基づいて実証したことである。より厳密に言えば、存在の **have** 構文については中右 (1994, 1998) がその主語は経験者と特徴づけられるとしていた説を所有の **have** 構文にまで発展させ、さらに、これら二つの **have** 構文はその概念構造において主語項である経験者と束縛関係を結ぶ項が存在しなければならないということを明らかにした点である。特に、所有の **have** 構文において、主語が表す経験者、つまり所有者は目的語が表す所有物を束縛する関係にあると捉えたのは極めて重要である。所有物は所有者に帰属する関係にあるので、前者の指示は後者の指示に依存するという意味で、両者にはまさに束縛関係があると言えるのである。所有の **have** 構文に関してこのような束縛関係を概念構造で明示的に示したのはこれまでの研究になく、本論文の最も独自で優れた貢献として高く評価することができる。

本論文の独創性をなす第 2 の点は、従来 **have** の関係を内包すると言われてきた二重目的語構文についても、所有の **have** の関係を継承するものと存在の **have** の関係を継承するものの 2 種類があることを突き止め、この 2 種類の区別が二重目的語構文の多様な現象を説明するうえで極めて重要であることを示した点である。とりわけ、存在の **have** の関係を継承するタイプの二重目的語構文については、従来の研究ではその存在が指摘されることのなかったものであり、それを発見したのは本論文の大きな功績である。さらに、二重目的語構文と前置詞与格構文が同一の意味なのかどうかという問題に対しても、本論文独自の観点から検討し、それらは概念構造が別個であることを明確にした点も評価できる。このように、本論文は二重目的語構文の研究にも重要な貢献をなすものである。

ただし、本論文にさらに求められることとして、次の 2 点がある。第 1 に、所有と存在の **have** に関連する現象として二重目的語構文が取り上げられ、それが非常に詳しく分析されている一方で、他の関連現象については分析の可能性が示唆されているだけなので、その分析をより具体的に行う必要がある。第 2 に、**have** には様々な用法があるが、本論文では最も基本的な所有と存在を表す用法しか扱っていないので、それ以外の用法に本論文の分析がどのように拡張可能なかを考察することが求められる。もちろんこれら 2 点は、今後の課題として取り組むことができるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

### 2 最終試験

平成 28 年 1 月 22 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。